そうだとする實證とはなし得ないことは先述した如くである。また鄉飲酒禮の席次に爵次が用いられた直接の例證もあげられていないので、氏の論のなかで、爵位が民間習俗に融けこんだ所に漢代爵制の實體があるとされる點については、その推論には敬服するものであるが、實證されたものとは認め難く、西嶋氏の爵制に對する考え方への贊成は保留し、私としては漢代の爵制は「官によって規定せられた位階」であるとする從來の考え方を修正するまでには至らない。

本書を讀んで私は漢代の民爵は理念としては或は氏の言われるようなものであるかもしれないと考えるようになり、この點は氏の大著より敎えられる所である。しかし前述の如く、氏の論が漢代社會の現實であり、また皇帝の齊民把握の實態であり、これこそ秦漢帝國の基礎構造の解明であるとされるならば贊成できない。さらにさかのぼって秦漢帝國を皇帝による人民の個別人身的支配であるとする本書の大前提にも疑義はある。皇帝による人民の個別人身的支配というような一本に割り切った理解も問題である。これは氏が序章において「豪强もすべて一般庶民と同じく皇帝の支配の對象となるべき民であったのである」と言うが、これは理念と現實と混同した議論を生む懸念があるものである。これらについては史觀の相違もあるであろうが、漢初には氏族制が完全に崩壞し、そのほかにも皇帝と人民との中間に介在する何物もないのであろうか。爵制による秦漢帝國基礎構造の解明は、皇帝の齊民把握の實體のあまりにも觀念的な追求にのみ終って、矛盾を含んだ社會の分析に缺けているように思われる。この點が苦心の大著であり、また從來見られなかった爵制に對するいくつかの創見にも拘らず、秦漢帝國の基礎構造を爵制に求めた氏の結論には承服できない點である。しかし本書は論理的にはすこぶる愼重に運ばれており、考えられる反對論、或は反對史料まで提示して、それに從わない理由を示し、明快な結論を提示して學界の批判を仰がれた氏の態度は偉とすべきである。學生時代以來畏敬する氏がこのような大著を完成せられたことは慶賀にたえない所である。しかし不幸にして西嶋氏の結論には從い得なかったが、歷史を常に高所よりダイナミックに解し、直ちに中國史の中核に迫ろうとされる氏の態度は、實證に汲々としている私などの以て範とすべき所であり、氏に對する畏敬の念は相變らず失われないものであることはあらためて申すまでもないことである。

（三六・一二・三〇　布目潮渢）

朝鮮史研究

內藤雋輔著

昭和三十六年十一月　東洋史研究會
A5版　六〇七頁　索引　二二頁

昨年三月、岡山大學を定年退官された內藤雋輔先生の多年にわたる研究の成果が、一書にまとめられて刊行されるに至ったことは、學徒のひとしく喜びとするところである。私事にわたって甚だ恐縮ではあるが、筆者は、岡山に赴任されるまえ、若かりし先生が、大谷大學の敎壇に立たれていたころの受講生の一人であり、いま本書を手にするにあたって、敎示にあずかった三十餘年前のことどもが、そこはかとなく想い出されてくる。編集の方から紹介の一文を

草せよともとめられたのも、そうしたえにしによることと、ひそかに思いめぐらしている。

本書、題して朝鮮史研究という。收むるところの論攷十二篇、こどごとくが朝鮮史の問題をまっこうから採りあげられたもので、終始一貫した學究の態度方向とそのきびしさを感ぜしむるものがある。前編に收められる七つの論攷は、直接高麗史に關するもの、後編にみられる五つの論攷は、朝鮮とその周邊の關係…特に交通を中心課題とした研究であり、うち末尾の一文「李朝史料による日鮮航路に就いて」は、これまで未發表のもの、餘他の諸篇は、既發表のもので、このたび增補訂正を加えられている。

一「高麗の大覺國師に關する研究」八〇頁におよぶ長文、卷頭を飾るにふさわしい雄篇であり、著者會心の作の一つであろう。

だいたい、朝鮮佛教が意氣さかんな様相を呈したのは、新羅統一時代と高麗の前半期であるといってよい。そして、新羅佛教の代表的人物が、おびただしい經論の註疏をつくったことにおいて名聲の高い元曉であるとすれば、高麗佛教のそれは、まさしくここに云う大覺國師義天に外ならないのである。義天は、崇佛國王として名高い文宗の第四子として生れ、父王の命にしたがって十一歳で出家した。そして、四十七歳で寂するまで、天稟の才幹と惠まれた環境によって、佛教の學解と實踐に、非凡な活躍を示したのである。朝鮮佛教の歷史的解明にこころざされた著者が、こうした大覺國師義天をとりあげられたことは、極めて適切である。

さて、義天の傳記究明にあたって、著者はまず史料の批判吟味から進められている。卽ち、希覯の書『大覺國師文集』・『同外集』のほか、根本史料として、林存撰「仙鳳寺大覺國師碑銘」・金富軾撰「靈通寺大覺國師碑銘」・朴浩撰「興王寺大覺大和尙墓誌銘」の三つの金石文のあることを紹介し、これらの貴重な史料を主要素材として、加えて朝鮮・中國の數多い文獻中にみえる關係記事を摘出し、考證驅使して、以て義天一生の事蹟を的確に示されている。本論攷が義天研究の劃期的成果であることは、云うまでもない。

ところで、義天一生の事蹟のうち、もっとも意義ぶかいものは、入宋求法である。元豐八年（一〇八五）五月に渡海して宋に入國し、翌元祐元年（一〇八六）六月に歸朝している。わずか一ヶ年の求法旅行ではあったが、その間つとめて各地を巡遊して、高僧知識を尋ね、華嚴・天台・律および淨土の教義を熱心に學びとった。しかも、佛典章疏の蒐集にはげんで、高麗にもたらし歸ったのである。入宋求法を企圖決行する事情から、旅行の經過に關する記載は、交通に特別の關心を示されている著者のことであるから、甚だ精緻である。歸國後の義天の活躍については、寺院の興隆、入宋以來いよいよ深く究めるに至った華嚴教學の宣布につとめて、高麗佛教教團に大きく寄與した事實を指摘されている。義天のひととなりにもふれて、性至孝にして自らを律すること嚴格であったと述べられている。さらに、「諸宗章疏の刊行」・「通貨制の建言」・「著作」の三項を立てて、義天の業績を論ぜられている。このうち、通貨制の建言は、歸朝後のことであって、したしく見聞した宋國の事情より勘案して、義天みずから國王に通貨を用いることを建言したのである。彼が國家政治に直接的に寄與せんとした事實として注目にあたいする。通貨制を受けいれるまでには發達していなかった高麗の經濟事情のため、所期の目的は達し得なかったようであるが、王室出身の義天のことであるから、彼の言動が國政に影響すること

は、當然考慮にいれて然るべきである。しかし、義天の業績の最大なるものは、云うまでもなく佛典章疏の蒐集と刊行とである。既に入宋求法の旅によって、當時中國に行われていた佛典章疏を數多く入手しており、歸國後もまた蒐集に懸命の努力をはらっている。時すでに謂うところの高麗版大藏經の雕印も、文宗時代に成就されていることであるから、さらにその增補追加が試みられたことであろう。そして、義天は蒐集した章疏の目錄をつくった。『新編諸宗教藏總錄』所謂『義天錄』がそれである。この事實を重視して、著者も、章疏刊行の有様を論述されているが、『義天錄』の內容については、章疏目錄の嚆矢としての榮譽は認めつつも、その分類法の亂雜なことを指摘するにとどまっている。

さきにも述べたように、義天畢生の努力は、佛典章疏の蒐集刊行にそそがれている。してみれば、『義天錄』所記の章疏を吟味することによって、はじめてその眞價が把握できるものと思う。事實そのなかには、學界未知の書名が少からず記されているのである。例えば、高麗とは甚だ緊密な關係にあって、しかも佛教のさかんに行われていた遼の僧徒によって著作された佛典章疏が、かず多く含まれているのである。そうしたことは、既に一部の學者によって注意されていることではあるが、さらに精細に究明すれば、『義天錄』記載の章疏のなかから、より多くの遼人の撰述を發見し得るかもしれない。換言すれば、『義天錄』は、單に高麗佛教解明の史料であるばかりでなく、遼佛教をとく鍵の一つであると云いうるのである。遼は、南の宋に書を送ることを堅く禁じていたが、高麗には好んで賜與している。そのことは、『高麗史』そのほかの文獻の記載によって明白である。現在は全く傳わらない遼版の大藏經（契丹大藏經）のごときも、明かに高麗には傳わったと思う。ともかく、『義天錄』の內容を檢討すれば、彼の章疏蒐集の意味が、いかに大であったかが判明する。卽ち、現在、學界未知の章疏の存在と流傳が考えられるわけで、凡そ朝鮮佛教のもつ歷史的意味も、たえずわが國と大陸諸國家との中間にあるものとして考慮するとき、おのずから明瞭となるものである。高麗版大藏經がいまなお、すぐれたテキストとして、わが國の佛教學者に重用されていることは、高麗の文化的遺產の貴重さをものがたっている。

なお、義天の著書として、著者は『圓宗文類』二十二卷・『刊定成唯識論單科』・『釋苑詞林』の三つを擧げている。このうち注意すべきは『圓宗文類』であるが、現在その完本は傳らず、著者の指示されるように、わずかに十四・廿二の二卷のみが續藏に收められているにすぎない。末尾に附された詳細な義天年譜と參考文獻の列記は、著者の用意周到さを證するものである。ただし、參考文獻のなかには、大屋德城氏の「朝鮮海印寺經板攷」（『鮮支巡禮行』所收）なども、揭載されて然るべく、また金石文に比して、史料的價値はとぼしいにしても、『釋門正統』卷三・『釋氏稽古略』卷四などに、義天の傳の見えることを、考慮されてよかろう。

ついでに、ささいなことではあるが、天台智顗の師たる南嶽慧思の說明にあたって、「慧思禪師の根本とする所は禪であって、法華經もこれによって法華三昧卽ち法華禪を修するのである……」（頁五六）とあるのに一言したい。この句は、著者の明示されるように、境野博士の『支那佛教史綱』から受けておられ、その意味するところは、慧思の宗教的實踐が禪定にあったことを示しているわけであろうが、かかる表現は、現今の讀者には、慧思がいわゆる禪宗

の人であったかの如き感をいだかしめる恐れなしとしない。いささか贅言を弄したが、本論攷が義天研究の決定版であることにかわりはない。

二「高麗風俗に及ぼせる蒙古の影響に就いて」　五百年になんなんとするながい高麗朝は、中國の諸王朝とたえず深い關係にあり、國家の消長も、中國から影響されること大なるものがあったが、就中、元朝から受けたことが最も大きく、そうしたことを、風俗の面において把握されたものである。頭髪のかたち卽ち開剃の採用、服裝・儀禮の蒙古風になっていく經過を、兩國の政治的關係の推移の線に沿うて、巧みに解明されていく。そして、大體において、高麗における蒙古風の採用は、武力をほこる元の强制によるものではなくて、むしろ、高麗自らが進んで行ったところであると主張し、朝鮮史を貫いて認められる事大思想のあらわれであると結論づけられる。論理の展開は頗るあざやかである。

三「高麗驛傳考」　高麗初期にあっては、さほど發達していなかった驛傳制も、元と交涉をもつようになってから、その急速な進歩をみせ、劄子の發行、驛站の設置取締、急遞鋪の設置組織などができて、驛站制度全般が完備されていった情勢を指摘する。特に元朝驛傳制に關する深い理解のもとに、高麗のそれを究明されていく態度は、極めて有効妥當であり、また元の影響の大であった高麗の様相を明かにされている意味において、前文と同一の史觀に立つ論攷である。

四「高麗兵制管見」　九〇頁におよぶ長文の力作で、高麗兵制史と云って然るべく、高麗における兵制の推移を、中國のそれとの關係を考慮しながら、論述されていく。その大綱は、府兵制より召募兵へ、ついで私兵へと移行したものであり、別抄・坊里軍・煙戸軍など、高麗獨自の兵制も認められるが、中國諸王朝からの影響すこぶる大であり、ほぼ唐から元への兵制變革の縮圖を高麗のそれに認めうると結論されている。

五「高麗時代の重房及び政房に就いて」　制度に關する研究で、他國に見受けられない重房及び政房の沿革を、政治情勢の展開していく線にそうて解明されている。初期の重房は、武官統率のため設置された場所であり、その聯務の官であったが、武將出身たる權臣の掌握するところとなるや、一般政治をもとることとなって、監察の任務、官吏任用の事務すら處理するに至った。重房の政治化にともなって、純然たる武將の團體たる將軍房、有力武將の私第たる都房なども發生した。ついで、權臣崔怡の時代からは、私第に置かれる政事堂の發生をみた。そして、一切の官吏任免の權をほしいままにしたと說かれる。重房と政房の相違は、前者が國家制度の一つとして、王城内に置かれたに反して、後者が權臣の私第に設けられたことにあると論ぜられる。ともかく、高麗政治の混亂していく過程を制度の上で論證されているのである。

六「高麗時代の鹽法について」　まず鹽稅の徵收が忠烈王の初年（一二七五）ごろから始まることを指摘し、ついで、鹽法の整備されていく事情を解明される。卽ち、鹽場の組織一般、換言すれば、鹽盆・鹽戸・鹽倉などの意味と設置について述べ、かつ具體的にその地理的分布情況を指摘し、あわせて、鹽法違犯者に對する國家の處置にまで言及されている。

七「高麗時代の鷹坊に就いて」　まず中國における鷹坊の發達を述べて、高麗のそれに論及されている。そして、蒙古の高麗支配に

おける弊政の一つとして、これを推考されているのである。

以上、前編各論攷を通じて認められる顯著な共通的特徴は、問題が高麗自體のことでありながら、それをつねにひろい視野から考究論證されているということである。ひらたく云えば、東洋史の立場にあって論旨を展開されているのである。また、かくすることによって始めて正鵠な判斷をくだしうるというのが、朝鮮史のもつ特性であるといってよい。朝鮮史は、朝鮮史の內容だけで理解してはならないのである。それは、つねに滿洲・中國との關連において考察すべきものであることを、著者は自らの研究態度において示されているわけである。

後編は、つぎの五つである。

八「新羅人の海上活動について」・九「朝鮮支那間の航路及び其の推移に就いて」・十「唐代中國における朝鮮人の活動に就いて」・十一「李朝史料による日鮮航路に就いて」・十二「李朝史料による日鮮航路に就いて」。個別的說明は省略せざるをえないが、いずれも、朝鮮と中國及びわが國との海上交通、ならびにそれによって派生した事象を取扱われたもので、年代的には古代よりわが明治のころにまで及んでいる。したがって、五論攷合して、日・中・鮮三國間の交通史を一應形成していると云っても過言ではない。そして、往時の交通について、有力な史料として用いられているもの一つが、圓仁の入唐巡禮行記であることに氣附く。著者自らもこの書を精査したと記されている。大陸や半島の事象に興味をもつものだけでなく、わが國史研究者にとっても、必讀の論攷に外ならない。

以上、繁簡よろしきをえないことではあるが、大體國師に關する一文を代表的にとりあげたものとして、讀者の御諒承を請いたい。ただ、朝鮮史には全くの門外漢である筆者が、敢て紹介の一文を草して、貴重な本書の學問的價値を、いささかでも損してはいないかと恐れるのみである。

著者內藤先生は、今後、初志にしたがって朝鮮佛教史の解明に精進されると聞く。中國史に對する該博な識見を背景に、ひろい視野に立って行われる先生の研究は、朝鮮佛教史に新な照明を投ぜられることとなるに相違ない。そして、その成果が一書にまとめられて刊行されることのはやからんことを切望してやまない。

（野上俊靜）

Studies on the Population of China, 1368～1953

Ping-ti Ho (何炳棣) Harvard East Asian Studies 4. Harvard Univ. Press, Cambridge, Mass., 1959.

本書の著者・何炳棣博士によれば、中國の人口問題を研究するにさいしての難しさは、統計資料の缺乏にあるのではなくて、それらをどのように解釋するかを理解するところにあるとの事であるが、中國の人口問題研究史をふりかえってみても、その主題は、統計に記錄されている數字を、どの程度まで、實態に近いものとして評價するか、いいかえれば、數字の信憑性如何の問題であって、この點を中心として議論が展開されて來たように思われる。本書は、この點に關する獨自の見解を提示する事によって成った、本格的且つト